

平成22年 5月21日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520048
 研究課題名（和文） 柳詒徴とその周辺－東南大学知識人の発展的研究－
 研究課題名（英文） Liu Yizheng(柳詒徴) and his surroundings
 －A advanced study on the scholars of South-East University－
 研究代表者
 野田 善弘 (NODA YOSHIHIRO)
 新居浜工業高等専門学校・一般教養科・准教授
 研究者番号：80290815

研究成果の概要（和文）：民国時期東南大学の主要知識人である歴史学者柳詒徴について、その同時代における学術思想的立場を明らかにし、あわせて、その思想形成過程について若干の考察を行った。思想的立場を明らかにする際には、その胡適・章炳麟・梁啓超に対する批判を解析し、明らかにした。また、思想形成過程に関しては、特に柳詒徴と明治日本との関係に焦点を定め、その中でも柳詒徴の日本体験記『日遊彙編』（1903年）の訳注を作成することで、今後の研究の端緒を開いた。

研究成果の概要（英文）：Liu Yizheng (柳詒徴) is an exponent of South-East University. This study deals with Liu Yizheng's research on his thought and surroundings. Liu Yizheng criticized Hu Shi (胡適), Zhang Binglin (章炳麟), and Liang Qichao (梁啓超). I deal with his criticism in this paper. Liu Yizheng is affected by the Japanese scholarship in the era of Meiji (明治). This topic is very considerable. While Liu Yizheng stayed in Japan in 1903, he kept a diary every day. "Riyou Huibian (日遊彙編)" is based on his diary. I translated "Riyou Huibian" into Japanese, and began to analyze relationships between Liu Yizheng and the Japanese scholarship in the Meiji era.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：柳詒徴・東南大学・明治日本・日遊彙編・胡適・章炳麟・梁啓超・銭穆

1. 研究開始当初の背景

(1)筆者は、2002年4月に中国南京にある東

南大学に在外研究員として派遣され、その際、
中華民国時代にも同名の大学が同地に存在

し、しかも北京大学に匹敵する中国東南地区唯一の国立大学であったこと、多くの優れた知識人たちが同校に集結していたことを知った。2003年に帰国し、以来東南大学およびその知識人に関する論文を発表してきた。2004年から2006年までの3年間、科学研究費補助金（若手研究（B））の交付を受け、民国時期東南大学の総論的研究をまとめ、そのうえで東南大学の代表的知識人の思想に関する個別具体的な研究に入った。

(2) 東南大学知識人の個別具体的研究として、筆者が最初にとりあげた知識人は、唐君毅（1909～1979）である。唐君毅は、1933年に国立中央大学に助教となる。国立中央大学は、東南大学を改組して成立した大学であり、民国時期東南大学と深い関係を有するが、唐君毅を「東南大学」の代表的知識人の一人に数える者はほとんどいない。しかしながら、唐君毅は、北京大学と国立中央大学（東南大学）の両大学において学生生活をおくるという実に珍しい経歴をもつ。唐君毅は両大学の学風を比較して次のようにいった。「民国15年以前の南京東南大学時期において、劉伯明先生や柳詒徵先生などが西洋の科学と中国の人文歴史をともに重んじる教育理想を樹立しており、これは当時の北京大学の学風が科学精神にもとづいて中国の歴史文化の価値を懐疑するものと異なっていた。」と。そして北京大学に学んでいたときから、唐君毅は「南京東南大学の教育理想は、比較的健康であると思っていた」という。筆者は唐君毅のこの言葉によって、東南大学が北京大学とは全く異なる学風を確立していたことを知ると同時に、北京大学という誰もが憧れる中国の最高学府に学びながら、いわば一段格下とみなされていた東南大学に憧憬の念を抱いていた人物がいたという事実を驚いた。かくして筆者は、唐君毅が憧れた東南大学の学風形成について強い関心を抱くに至ったのである。そこで、筆者は、東南大学の学風形成において大きな影響を与えた人物の研究を始めた。いみじくも唐君毅が指摘するように、東南大学の学風を考えるうえで、鍵となる最も重要な人物は、劉伯明（1885～1923）である。劉伯明は中国近代思想史において全く無名な人物で、まとまった著述もないが、筆者は『学衡』や『新教育』、『少年中国』の各雑誌よりその論文等を拾い集め、その思想について分析した。

(3) 唐君毅は、東南大学の「健康的」学風をつくりあげた人物として、劉伯明と並んで柳詒徵（1880～1956）を挙げている。筆者は引き続き柳詒徵研究にとりくもうとしたが、残念

ながら科研費による研究期間が終了した。そこで、筆者は、東南大学知識人の研究をさらに発展させるべく、あらためて科研費を申請し、柳詒徵を中心に据えた研究課題を設定した。今回、柳詒徵という個人を扱ったことには重大な意味がある。前回の科研費の課題は「東南大学知識人の思想に関する研究」と題して、特定の個人に照準を合わせたものではなかった。本研究において筆者は、1921から1927にかけての東南大学時期7年間を横断的に理解することを目的とし、この7年間に東南大学と関わった人物を多く拾い上げた。しかしながら、東南大学は、その起源を清末（1903年）に設立された師範学校、三江師範学堂へ遡ることができる。また、東南大学は、幾度となく名称変更して国立中央大学が成立、中華民国の終わりとともに消滅するまで連続と続いていく。さすれば、東南大学を縦断的に理解することも必要であり、これによって南京アカデミズムの世界を描き出すことが可能になるだろう。筆者は、そのような企図をもって、東南大学知識人の研究を進展させようと考えた。しかし、縦断的な研究をなそうとするならば、なぜ柳詒徵という個人を対象とした研究を行うのか、という疑問が呈せられるかもしれない。筆者はこのような疑問に対しては次のように答えよう。「柳詒徵こそ南京アカデミズムの歴史そのものである」と。柳詒徵は、清末の三江（両江）師範学堂の教習を務め、中華民国時代に三江師範の伝統を引き継いで成立した南京高等師範学校、東南大学、国立中央大学において、教授をつとめた。その意味で南京アカデミズムの牽引者にほかならない。『学衡』のエディター吳宓（1894～1978）が、「南京高等師範学校の功績・学風・名声は、すべて柳先生一人の多年にわたる教育の成果に由来するものだ」と述べ、柳詒徵を東南大学や国立中央大学の基盤というべき南京高等師範学校の学風をつくりだした人物としていることは、筆者の研究の方向性が決して誤りではないことを示している。筆者は、柳詒徵を理解することこそ、近代南京の知的状況を了解する鍵だと考え、本研究の課題を「柳詒徵とその周辺—東南大学知識人の発展的研究—」とし、柳詒徵研究を開始したのである。

2. 研究の目的

(1) 筆者の研究の最終的な目的は、近代南京アカデミズムの様相を描出することにあるのだが、これは短期間に実現できるものではない。このためには、従来の中国近代思想史においてはほとんど研究されていない、忘れられた思想家たちをひとつひとつ具体的に考察し、これを積み重ねていくほかない。先に「背景」において述べたように、筆者は近代

南京アカデミズムの基盤をつくった人物こそが柳詒徴であると考えている。本研究は、柳詒徴の個別具体的研究を通して、近代南京アカデミズムの解明へ一歩でも二歩でも近づいていくことを目的とするものである。

(2)以上が本研究の目的の大枠であるが、もう少し具体的に目的について論じる。柳詒徴を正面から論じたものは、ほとんどない。それは、柳詒徴が『学衡』の主要メンバーであったことや顧頡剛(1893~1990)らいわゆる『古史弁』グループを批判したことなどから、頑迷なる守旧のイメージを結んでしまったからである。周予同は、近代中国の歴史学を今文学と古文学の対抗関係から描き出したが、今文学こそが革新の原動力であったとし、今文学を評価する立場をとり、古文学を奉ずる学者たちを批判した。周予同は、柳詒徴を古文学者とみなし、守旧という負の評価を与えた。このようなことから、柳詒徴研究は十分に進まなかった。本研究において筆者は、このような同時代人の評価に惑わされず、先入観を捨てて柳詒徴の言論を解析し、その学術上における立場を検討しようとする。特に当時の学術界における動向をふまえ、その中で柳詒徴が何を考え、何を発言したのか、その思想的立場について明確にしようとした。

(3)柳詒徴の思想的立場を明らかにすることに続いて、その思想形成過程について考えたい。柳詒徴の学問に大きな影響を与えた人物は、繆荃孫(1844~1919)である。筆者はこの二人の関係性に着目し、研究を進めようとした。もうひとつ興味をひかれるのは、柳詒徴の著書や論文に目を通してみればすぐに気づくのだが、柳詒徴がその中に日本人の著作を数多く引用していることである。1901年、繆荃孫は、江楚編訳局を開設、柳詒徴を助手(「分纂」)として採用した。1903年、柳詒徴は、繆荃孫を代表とする日本教育視察団のメンバーに選ばれ、わずか2か月たらずの滞在ではあったが、明治日本を自ら体験するのである。また、那珂通世の『支那通史』を参考にして『歴代史略』を編纂するなど、日本の歴史学に深い造詣を有した。筆者は、柳詒徴と明治日本の学術界との関係性に着目して、思想形成過程を考えようとするものである。

3. 研究の方法

(1)関連書籍の購入を行い、資料をそろえた。「研究の目的」の(2)にあるように、筆者は明治日本の学術と柳詒徴との関係性を調査することに力を注いだので、中国近代思想史関

係の書籍のみならず、明治期日本の東洋史研究に関する書籍や日本近代教育史関連の資料を多数購入した。柳詒徴の思想の根底にある日本の中国研究について、これらを用いて理解した。

(2)図書館の資料調査を実施し、関連資料を収集した。直接経費の一部を使用して、南京図書館および上海図書館の所蔵資料の調査を実施した。特に南京図書館では、繆荃孫や柳詒徴に関する資料を多く閲覧し、近代南京の教育状況についても理解を深めた。また、筆者の所属機関から配分された旅費を用いて、本邦の図書館の調査も行った。特に東京都立図書館の実藤文庫において、清末中国人の日本教育考察に関する資料を多く閲覧し、繆荃孫ら日本教育視察団の性格について理解することができた。また、国立国会図書館では、日本教育史関連の書籍を閲覧し、研究を深めた。

4. 研究成果

(1)本研究は、柳詒徴の個別具体的研究を行うものであるが、課題名に「柳詒徴とその周辺」と題したように、柳詒徴をとりまく思想状況についても考察を加え、特に同時代人の柳詒徴に対する評価について拾い上げた。すでに「研究の目的」で触れたように、柳詒徴は守旧派とみなされ、その学問は同時代人に受け入れられず、批判された。しかし、柳詒徴を評価した人物も、わずかではあるが存在する。柳詒徴の受業の門弟たちを除いて、柳を高く評価した人物として特筆すべきは、銭穆(1895~1990)である。銭穆は、「柳詒徴」(1971年)と題する一文の中で、その史学思想について明晰に論じている。柳詒徴研究の手がかりとして筆者の研究を裨益すること大であった。ところで、筆者は銭穆についても関心をもち、拙論を発表してきた。今回、研究成果として「中国の史学について(二)一銭穆『現代中国学術論衡』訳注稿」を発表した。ここで銭穆は、中国史学の特徴として「褒貶」を挙げているが、これは柳詒徴の史学に対する考え方と奇しくも一致している。今後、銭穆と柳詒徴の史学を比較検討していくことも筆者は考えており、本稿はその端緒を開いたものである。

(2)「研究の目的」の(2)に述べたように、筆者は、まず柳詒徴の思想的立場を明らかにせんとした。柳詒徴の立場を明らかにするにはどこから手をつけるべきか、筆者は銭穆の意見にしたがって、主著『中国文化史』ではなく、「近人諸子の学を講ずる者の失を論ず」を精

読することから始めた。本論文は、胡適・章炳麟・梁啓超の学問が「主観に偏し」「足を削って履に適合せ」るものであると批判したもので、柳詒徴の学術思想的立場を理解するのに最も役立つ論文である。その成果が「柳詒徴の同時代批判—『近人諸子の学を講ずる者の失を論ず』を読む—」である。この中で明らかになったことは、まず今古文の争いに対する柳詒徴の態度である。「研究の目的」の(2)に論じたように、周予同は、柳詒徴を古文家の系統に分類したが、柳自身は古文学派に身を置いたわけではなく、中立的立場をとった。柳詒徴は、疑古に偏する今文学派を批判したが、章炳麟を批判の俎上にのせたことからわかるように、その古文学に対しても是是非非の態度をもって向かう。この意味で、周予同の論は修正されなければならない。また、特に梁啓超批判を通して明らかになったのは、柳詒徴が日本の中国研究に深い造詣を有していた点である。柳詒徴は、日本の中国研究を「根底なし」と批判したが、日本の研究成果を十分に意識していたことがわかる。今後は、これを視野に入れて、柳詒徴の思想形成過程を明らかにしていきたい。

(3)「研究の目的」(3)に記したように、柳詒徴の思想形成過程を考えていくうえで、日本の東洋史学との関係を視野に入れなければならないと筆者は考える。柳詒徴が日本を強く意識したきっかけは何か。それはもちろん繆荃孫と出会い、江楚編訳局に入局したことが、それに当たるだろう。中でも、柳詒徴が繆荃孫を代表とする日本視察団のメンバーに選ばれ、日本の学校視察を行ったことは、柳に大きな衝撃を与えたのではないかと推察される。そこで、筆者は、柳詒徴と日本の関係性を考えるにあたって、はじめに柳詒徴の日本視察旅行をとりあげようと考えた。この日本視察旅行の報告書『日遊彙編』は、南京図書館と東京都立図書館実藤文庫に所蔵されている。筆者はこれ入手し、訳注を施し、この成果は『日遊彙編訳注』として冊子にまとめ、少部印刷した。『日遊彙編』は、繆荃孫を代表とする日本視察団が発行した報告書であり、柳詒徴のひとりの手に成るものではない。しかしながら、柳は当時を回想した文章（「記早年事」）の中で、この『日遊彙編』の原資料が自らの日記であることを告白している。とすれば、『日遊彙編』は、柳詒徴の思想形成過程を理解するうえで、必ず参考にしなければならない資料である。筆者が訳注を行い、精読を試みた理由はこの点にある。『日遊彙編』は、繆荃孫の「序」、「高等師範学校校長嘉納君所講」、「表」、「日本考察学務遊記」、「日本訪書記」から成っているが、本稿ではこの中から「序」・「高等師範学校校長

嘉納君所講」・「日本考察学務遊記」を訳解した。今後は、これをもとに、柳詒徴の日本体験が、その思想に与えた影響や刺激について研究を深めていきたい。なお、「高等師範学校校長嘉納君所講」は、高等師範学校校長、嘉納治五郎の講義を収録したものだが、筆者はこれを資料として市民講座を行い、研究成果を市民に公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 野田善弘、柳詒徴の同時代批判—『近人諸子の学を講ずる者の失を論ず』を読む—、東洋古典学研究、査読無、29巻、2010、pp. 63—95
- ② 野田善弘、中国の史学について(二)—銭穆『現代中国学術論衡』訳注稿、新居浜工業高等専門学校紀要、査読無、44巻、2008、pp. 84—92

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野田善弘 (NODA YOSHIHIRO)
新居浜工業高等専門学校・一般教養科・
准教授

研究者番号：80290815

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：